

3.3 「ICF 関連図」の活用について

教育支援部 主任研究員 徳永 亜希雄

教育支援部 総括研究員 松村 勘由

平成 21 年度特別支援教育研究研修員 加福千佳子

(青森県立弘前第一養護学校 教諭)

平成 21 年度特別支援教育研究研修員 小林 幸子

(静岡県立中央特別支援学校 教諭)

はじめにー「ICF 関連図」とはー

「2.3」で述べたとおり、特別支援学校での ICF 又は ICF-CY の活用状況について尋ね、活用の観点の選択肢として、「ICF 関連図」に関連した次の4つを用意し、ICF 又は ICF-CY の活用有りと回答した学校 169 校のうち、それぞれ 54 校、34 校、8 校、10 校から回答があります（複数回答有り）。

- ⑧ ICF の概念図を模した図（以下、「ICF 関連図」）を用いて幼児児童生徒の情報を整理する方法
- ⑨ 「ICF 関連図」等で幼児児童生徒に関する複数の情報を関連づける方法
- ⑩ 「ICF 関連図」作成作業を共有する方法
- ⑪ 作成された「ICF 関連図」を共有する方法

今回の調査では、これまで報告された実践報告等を参考にしながら設問の設計を行いました。それらの中で多く活用されていたものが「ICF 関連図」です。ここでは、「ICF 関連図」について「ICF の概念図を模した図」として説明しましたが、実際にそれ以上の定義はありません。

国立特別支援教育総合研究所では、全国各地の特別支援教育（特殊教育）関係者等と協力しながらこれまで ICF 及び ICF-CY の活用に関する研究に取り組み、その中で「3.2」で述べた ICF の概念的枠組みを生かした取り組みを多く行ってきました。現在は「ICF 関連図」と呼んでいるこの図も、その経過の中では「モデル図」、「関係図」、「相関図」等、様々な呼び方をしていました。筆者の一人、徳永が、日本社会事業大学からの研究成果報告書（1998）を参考にしながら、このような図を発表したのは 2003 年でした。その中では、「ICF モデル図をもとにした A 君の実態図」と記しています。

それらの経過の中で、2005 年に「ICF（国際生活機能分類）活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー」を出版した前後から、ほぼ「ICF 関連図」と呼ぶようになりました。ただし、あくまでも厳密な定義はない通称です。

「ICF 関連図」では、健康状態、心身機能・身体構造、活動、参加、環境因子、個人因子に、後述する本人の気持ちなども交えて多面的・総合的に子どもの生活をとらえ、またそこに書き込まれた情報の相互作用を考えながら情報を整理するものです。

ICF 及び ICF-CY の活用では、「ICF 関連図」を必ず使わなければならないわけではなく、また、それそのものが ICF 及び ICF-CY 活用でもありませんが、特別支援教育における「ICF 関連図」

を用いた取り組みは決して少なくないため、あらためて、ここで整理しておきたいと思います。

1. 多様な「ICF 関連図」

筆者は、研修の機会等では、「ICF 関連図」について説明をする際、前述の内容に加え、以下のような説明をします。

- ① ICF には含まれない本人の気持ち（「主観・主体」等）を付加したものが多い。
- ② その中から対象児 / 者の教育課題や指導・支援の手がかりを検討する等に使われることが多い。
- ③ 1 枚の紙面上に多くの情報を盛り込んだもの、ある特定の内容の実態に絞ったもの、ある特定のゴールを想定したもの等がある。
- ④ 「話し合いのツール」目的や「資料」目的、それらの併用等がある。
- ⑤ 「計画検討型」や「特定の課題解決型」等がある。
- ⑥ 異なった時制を一枚の紙に表したもの、集団を同時に描いたものもある。

①については、「3. 2」で述べたとおり、実際の子どもの指導と支援のためには本人がどう感じているのかということを外すことはできないという観点から、表現はそれぞれですが、加えられていることが多いです。事例編では、「4. 2」や「4. 9」では「主体・主観」として、「4. 6」では「本人の気持ち」としてそれぞれ取り入れられています。

②については、「ICF 関連図」を用いる取り組みで多く見られ、事例編「4. 5」では、本人にとっての教育課題を焦点化するために用いられています。

③については、まず多くの情報を盛り込んだものとして、事例編「4. 5」では、子どもの全体像を描くためのものとして作成されています。子どもについてのすべての情報をこの図の中に入れることはできませんので、ここでの全体像とは、大まかな全体像をつかむという意味と理解できます。次に、ある特定の内容の実態に絞ったものとしては、次の図1が挙げられ、ある特定のゴールを想定したものとしては、図2（「3. 2」図2再掲）が挙げられます（徳永，2005）。このような図を用いると授業の中での具体的な活動場面の検討や学校以外の関係者も含めた検討等にも用いることが可能となります。

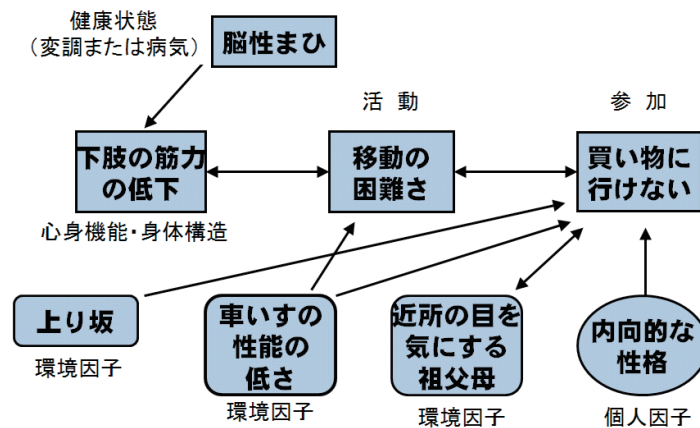


図1 ある特定の内容の実態に絞った「ICF 関連図」

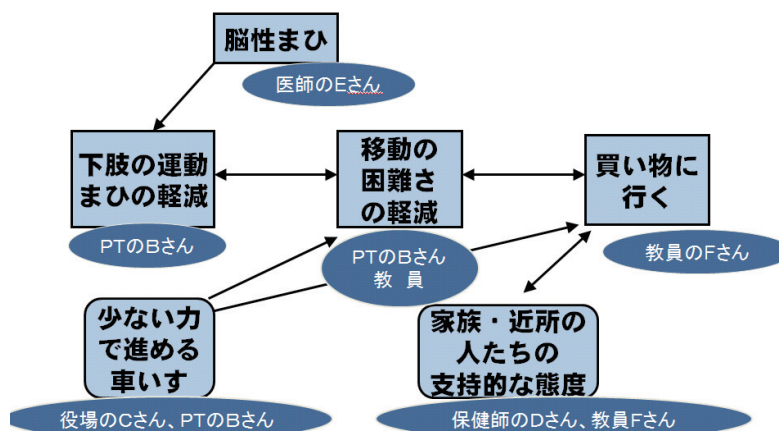


図2 ある特定のゴールを想定した「ICF 関連図」

④については、とても重要なポイントなのですが、見落とししがちな観点といってもよいかもしれません。「2.3」において、ICF 又は ICF-CY を活用した成果として、教職員間の共通理解等や連携がしやすくなったということが挙げられています。多くの実践報告や筆者の経験からも、話し合いのツールとして、「ICF 関連図」の作成過程を共有したり、一部の担当者が作成した「ICF 関連図」を用いて話し合うことで、実態把握がしやすくなったり、共通理解が図りやすくなったりすると思われていますが、その図を引き継ぎの資料としてそのまま使うと、そのことに直接かかわっていない人にはその図が分かりにくい場合も見受けられます。また、それ以前に ICF についての基本的な理解がないと、「ICF 関連図」に表されている内容が分かりにくいといえます。

「2.3」では10校から「ICF 関連図」を共有していると回答がありました。事例編「4.5」では、年度当初に「ICF 関連図」を作成して実態と課題を整理し、年度末に再度作り直して子どもの変容を確認するといった、話し合いのツールとして用いた後に資料としても用いる取り組みが行われています。

⑤については、目的が全く異なるため、扱う情報にも質的な違いがあります。事例編「4.5」は前者の「計画検討型」にあたり、比較的じっくり時間をかけながら、多くの情報を整理する形をとります。一方、教育相談での事例「4.2」は、後者の「特定の課題解決型」にあたり、主訴等を手がかりに、それに関連した情報を集めながら背景等を考え、問題解決に導くものです。

そのため、「計画検討型」よりも短い時間で対応することになります。このことは、緊急の対応が求められる校外でのケース会議や授業場面での子どもの活動の事前検討にも活用できると考えられます。

⑥の異なる時制を1枚に収める方法は応用編といってよいかもしれません。「赤本」では、ICFによる生活機能の記述をある瞬間の状況を瞬間撮影記録のように表し、時間枠を定めるように述べていますが（障害者福祉研究会，2002），事例編「4.9」のように卒業後の状況と現在の状況を比較しやすくするために、という明確な目的がある場合は応用の範囲としてあり得るのではないかと筆者は考えています。

一方、事例編「4.6」の図2は集団の中での個々の子どものことを1枚の紙に表したものです。ICFは個人の生活機能の記述と、統計等において一定の集団の状況を表すことも想定されています。また、特別支援教育関係者から「『ICF関連図』で集団を表せないか？」という問い合わせは今まで何度か受けたことがあります。これらを踏まえると、集団での授業づくりを目的としたこの図のような活用の仕方もあり得るのではないかと筆者は考えています。

2. 「ICF 関連図」活用の実際

これまで述べてきたように「ICF 関連図」の目的や活用の仕方は多様ですが、ここでは一例について述べたいと思います。大久保（2007）は、図3のワークシートと付箋紙を用いて本人にとって望ましい参加・活動の姿を想定し、そのことに関連する実態を洗い出し、支援計画を作るための「ICF 関連図」作りについて報告しています。このワークシートにも先に述べたとおり、主体・主観が独自に加えられています。

The worksheet is a rectangular grid with several boxes for text entry. At the top center is a box labeled '<健康状態> 衰弱または病気'. To its right is a box titled 'ICF関連図を使った話し合い' containing fields for '対象者:', '参加者:', 'ICF関連図作成日: 年 月 日', and '再検討予定日: 年 月 日'. Below these are three large empty boxes for notes, each with a header: '<心身機能・身体構造>', '<活動> 課題や行為の個人による遂行', and '<参加> 生活・人生場面へのかわり'. At the bottom are three smaller boxes: '<環境因子> 物的・人的・制度的環境', '<個人因子> 体力、習慣、経験、性格 困難への対処方法 など', and '<主体・主観> 本人の気持ち など'.

図3 望ましい参加・活動から支援計画を考える際のワークシート（大久保，2007）

ここでは、ある事例について、話し合いを通して望ましい参加の姿を合意した後、付箋紙に関連した事例についての情報を書き込み、ワークシートに貼り付けながら作業を進めていきます。大久保報告を参考にしながら、筆者が研修等で同様の作業を行う際の留意点について、以下に簡単に述べます。

○付箋紙に書き込む内容はシンプルに

付箋紙にはできるだけ因果関係等は混ぜずにシンプルに書き込みます。例えば注意が散りやすく授業に集中しづらいような実態がある場合、それらの情報を一枚に書くのではなく、「注意が散りやすい」と「授業に集中しづらい」の2枚に分け、前者は、＜心身機能・身体構造＞の欄に、後者は＜参加＞の欄に貼り付けるようにします。

○分類項目と子どもの情報

大久保報告では、まず参加・活動の情報から書き出し、次に環境因子・個人因子を検討するような順序になっていますが、ICFのことにあまり詳しくない場合、まずは子どもの情報を書き出し、それがどこに分類されるのかを後から考えた方が良いでしょう。慣れないうちは、どこに分類されるのか迷うこともありますが、分類そのものが目的ではなく、子どもの状況を理解していくことが目的なので、「赤本」にある心身機能等の定義を参考にしながら、その場での一定のルールを作り、対応していくほうが良いと思われまます。活動か参加かということで迷った際は、個人の範囲なら活動、他人や社会との関係がある場合は参加、という対応がその例になります。

一方、「2.4」、「3.2」、「5.2」、「5.3」では、ICF-CY チェックリストから評価を始める方法を、活用方法の一つとして述べています。事例編「4.5」や「4.9」では、ICF-CY の分類項目のセットを最初の段階で使いながら「ICF 関連図」を作成する取り組みがなされていますが、「4.6」の学校では、今回の報告では明記されていませんが「ICF 関連図」を作成した後にICF-CY の分類項目のセットを用いて、子どもの情報について見落としした点がないかどうか確認する取り組みを行っています。ここで述べている大久保報告をもとにした「ICF 関連図」作りの取り組みでは、後者に当たります。

なお、特別支援教育に適したICF-CY チェックリスト開発の取り組みについては「2.4」で述べています。

○作業を通して共通理解を図っていく

「ICF 関連図」については話し合いのツールとしての側面と資料としての側面があるということをお先に述べました。この取り組みは、主に前者になります。例えば、ワークシートに入りきれないほどの多くの情報になった時には主な内容に絞り込んでいく必要が出てきます。その際、書き込んだ付箋紙を出した人に対して直接意見を述べるのではなく、書き込まれた付箋紙に対して意見を述べることになるので、皆が向かう視線も付箋紙の方になることで、その集団の中で意見を述べるのに躊躇するような人でも、比較的意見が述べやすくなる光景をよく見かけます。また、同じような取り組みとしてKJ法等を参考にしながらカードで話し合いをすることがありますが、これも筆者の経験の範囲ですが、「生きることの全体像」（上田、2005）といわれるICFの枠組みを用いた話し合いのほうが、より幅広い視点で子どものことを考えることができるようです。このような作業を通して、子どもを中心に置きながら、関係者の共通理解を図っていくことができます。

一方、「2.3」で述べたICF 又はICF-CY 活用上の課題の中で3番目に多いのが「作業が繁雑である」でした。この中には、おそらくこの「ICF 関連図」作成のことも含まれていると推察されます。それらを効率化・簡便化するものの一つとして、本研究では電子化ツールの開発を手がけ、

その概要を「5.3」で述べています。現在、試案検討の段階であり、改良の必要がありますが、「ICF 関連図」作りも含めて、特別支援教育、そして関連分野との連携のもとでの ICF 及び ICF-CY 活用の取り組みに資するものだと考えています。

3. 最後に

ここまで、特別支援教育の中でよく使われる「ICF 関連図」の活用について述べてきました。ICF 及び ICF-CY の活用の中で、必ず「ICF 関連図」を使わなければならないわけではなく、また、それぞれのものが ICF 及び ICF-CY 活用ではないことは既に述べましたが、子どもの多面的・総合的な理解や関係者の連携等において有用なツールの一つであると考えられます。図式化されることで、事例編「4.9」で述べた本人参画の取り組みにもつなげやすいものだと思います。今後、これまでの蓄積をさらに整理し、検証しながら、より効果的な「ICF 関連図」作成について検討を進めていきたいと思っています。

文献

- 1) 学校法人日本社会事業大学社会事業研究所 (1998). 社会福祉援助への国際障害分類 (改正案) の活用可能性に関する研究—1997 年ベータ 1 案—の事例への適用—. 1997 年度共同研究報告書.
- 2) 大久保直子 (2007) ICF 関連図作成手順マニュアルを検討した取り組み. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著 (2007). ICF 及び ICF-CY の活用 試みから実践へ—特別支援教育を中心に—, 110-117. ジアース教育新社.
- 3) 障害者福祉研究会編集・世界保健機関 (WHO) (2002). 国際生活機能分類—国際障害分類 改定版—, 212. 中央法規.
- 4) 徳永亜希雄 (2003). 子どもの暮らしに根ざした, 地域の社会資源ネットワークの中での自立活動の展開—A 君自身へのかかわりと A 君を取り巻く社会資源とのかかわりを通して—. 独立行政法人国立特殊教育総合研究所研究紀要第 30 巻, 81-91.
- 5) 徳永亜希雄 (2005). ICF と個別の教育支援計画. 独立行政法人国立特殊教育総合研究所・世界保健機関 (WHO) 編著. ICF (国際生活機能分類) 活用の試み—障害のある子どもの支援を中心に—, 81-90. ジアース教育新社.
- 6) 上田敏 (2005). 国際生活機能分類 ICF の理解と活用 人が「生きること」「生きることの困難(障害)」をどうとらえるか. きょうされん.